

清水宣昭書き入れ本『うひまなび』について

杉 戸 清 彬

清水宣昭は、幕末から明治の初めにかけて、名古屋納屋橋^{なやばし}の地で生^い鯖問屋^{さば}を営んだ富商であり、また、鈴木浪や本居春庭、また藤井高尚の教えを受けた国学者でもある。近年、茅場康雄氏の詳細な研究が継続的に発表され、^{〔注〕}『紫式部日記釈』を代表とする、その学問的業績が改めて顕彰された。稿者も偶々めぐりあつた宣昭自筆の歌集『宣昭集 五』及び『七編宣昭雜録』を紹介した。^{〔注〕}

今回は、新たに入手した、宣昭自筆と思われる多くの書き入れがある『うひまなび』の版本について、その概要を紹介したい。

一

『うひまなび』は、言うまでもなく、賀茂真淵の著した、百人一首注釈書である。入手した本は、天明元年（一七八一）刊の五冊本（上之一、上之二、中之一、中之二、下之終）であり、百首中6首を除いて、残り94首の上部空欄に『百人一首改観抄』（以下『改観抄』）が抄出書写されている。また、宣昭の見た『改観抄』にあった本居宣長等の書き入れが写されていて、その書写者は筆跡からしても清水宣昭であろうと考える。さらに、宣昭の見た『改観抄』が「稲田

元廣」なる人物の所持本だったことは識語によって明らかであり、後に述べるが、宣昭はそれを抄写するだけでなく、僅かではあるが自分の考えも記している。以上のように、本書は、宣昭資料として十分な価値を持っていると考えるものである。

二

本書「下之終」巻最終丁表（裏は真淵の後書、前丁から続く順徳院歌の注の最終部分（五行）の後の余白（六行分）に、次のような識語がある。（濁点・句読点は稿者）

稲田元廣がもてる改観抄をかりてその説を所々書くはへつ。又朱をもて書入としるしたるもその本にありし説ども也。

文政九年戊戌正月廿二日 清水太左衛門宣昭

右の文中「朱をもて書入としるしたる」というのは、書写部分の後ろに朱墨で「書入」と記したということであり、実際そのようになっている。また、その部分には書き始めの右肩にも朱墨で「一」

という印（合点）が付されるのが常であり、『改観抄』からの抄出部分には、そのような朱書は一切見られないので弁別は容易である。さて「稲田元廣」であるが、この文字のままでは該当する人物を捜し得なかった。しかし『名家伝記資料集成』及び『高山市史』には「稲田元浩」の名が載る。一字の異なりには躊躇するが、本稿ではこの人物であると想定して論を先に進めたい。『名家伝記資料集成』には

一七 稲田元浩
五九 稲田元浩

飛驒、医家、江戸住、姓神代、大正十年田中大

・故学人姓名録

とある。「大正」は明らかに誤りである。『高山市史』下巻「文藝編第二章 国学及和歌」の項には

稲田 元浩

白燕斎と号した。吉城郡船津町の人、医を業とした。田中大秀に就いて国学、和歌を学んだ、大秀の最初の門人である。博学で業余門人を指導した。また大秀と共に神社の考証に努め、高原旧事^{（註）}を著した。天保十三年七月二十五日歿した。年七十四。遺稿白燕斎歌集がある。

とある。歿年から逆算すれば、明和六年（一七六九）の生となる。田中大秀が本居宣長に入門したのが享和元年（一八〇一）25歳のことであり、本格的な活動は文化以降と思われるので、稲田元浩の大秀への入門は、文化十年（元浩45歳）、文政十年（元浩59歳）、天保十年（71歳）のいずれかだが、宣昭の元廣本『改観抄』抄写が文政九年であるし、「大秀の最初の門人」でもあることから、文化十年（『名家伝記資料集成』の「十年」という記述が正しいとしてのことだが）としてよいと思われる。大秀は37歳である。先に述べたように、元

廣本^{（註）}『改観抄』には本居宣長の書き入れが写されている。これを本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本『改観抄』と見合わせてみると一致するものが多い。その点から推量すれば、宣長手沢本『改観抄』を大秀が写し、それが元廣所持本となったか、あるいは大秀本をさらに書写したのが元廣本であるかのいずれかである可能性が高いと思う。書写の正確さからすると大秀書写本が元廣に伝わったと考えた方が、断定はできない。大秀が宣長手沢本を写したとすれば、文化元年に松阪に赴き、約二か月間滞在して宣長の遺著を騰写した時のことではないかとの推定もつけ加えておきたい。

臆説を述べたが、架蔵本の紹介が本稿の目的なので、以下、『改観抄』の写し、朱で「書人」と注記されたもの、そして宣昭自身の考察等を順次見て行くことにする。

三

まず、量的に最も多く、宣昭の書写の目的の中心的な位置にあると思われる『改観抄』からの抄出についてだが、書き入れが全くない6首は、百人一首の順序を番号で示した場合の、15番（光孝天皇歌）、27番（中納言兼輔歌）、28番（源宗于朝臣歌）、44番（中納言朝忠歌）、47番（惠慶法師歌）、71番（大納言経信歌）の各歌である。特に注意すべき共通性はないように思う。書き入れの必要を感じなかったと想像しておく。

その他の94首についても、書き入れは長短定まりないが、仮名遣いの相違以外は、誤りのほとんど見られない、極めて忠実な写しである。『改観抄』の追考の部分が写されている場合もある。

どのような個所に注目して宣昭が『改観抄』の抄写を行なったか

は、94首のそれぞれについて該当部分を示すべきであろうが、今その余裕はない。ただ、おおよその印象を記せば、歌意に関する部分に宣昭の主たる関心があるように思われる。『改観抄』の注釈文中「歌の心は」で始まる部分の写しが多く見られるし、そうでない場合も『改観抄』を参照するとすぐ前が「歌の心は」とある場合が多い。宣昭は『うひまなび』と『改観抄』の、主に歌意の理解の相違に關心があったものと考えている。しかし以上のことは実例を見て行かねば何の意味もないことであろう。試みる機会があればと思う。

右以外で目に付くのは、『うひまなび』が例歌や史料として『改観抄』と同じものを挙げている場合は、必ずそのことを指摘していることである。たとえば、天智天皇歌について、『改観抄』が『万葉集』の「秋田苅借盧乎作吾居者衣手寒露置爾家留」を引用し、『うひまなび』も同歌を引用する場合、その上欄には

秋田苅云々

改観二出

と註記されるのである。全体についてそうである。宣昭がそれにくだわった理由は、他の考え方もあるかもしれないが、稿者としては『うひまなび』に『改観抄』が与えた影響を確かめてみたいという宣昭の関心によるものではないかと考える。

また、宣昭の読みが緻密だったと考えられることは、次の例で代表させておきたい。『百人一首』成立にかかわる『明月記』の引用部である。宣昭は次のように頭書した。

改観抄所引毎乙未朝空晴五字有二十七日四字予下本自二字知下
每書字由為旨切下有雖極見苦四字来下人字歌下各一首上四字
これは『うひまなび』所引の『明月記』本文を、『改観抄』所引の『明月記』本文に照らしてその違いを記したもので、意味する所

は『うひまなび』にある「乙未朝空晴」の五文字が『改観抄』には「毎」く「毎」は「母」の誤用で「無い」という意味だろう）、「二十七日」の四文字が『うひまなび』にはないが、『改観抄』には有り、「予」の下に「本自」の二文字が有り、「知」の下に「書」の一字が無く、「由」は「旨」となっており、「切」の下に「雖極見苦」の四文字が有り、「来」の下に「人」という字があり、「歌」の下に「各一首上」の四文字が有るといことだろう。対校は厳密になされている。同じように『うひまなび』と『改観抄』の比較は全巻にわたって精確に行なわれていると言えるように思われるのである。

ここで仮名遣いの相違を列挙する。宣昭の書いたものを掲げ、それに対応する『改観抄』の表記を（ ）内に示す。（傍線は稿者。）

・あか月におく（をく）　・ゆゑ（ゆへ）　・ひとすち（ひとすし）　・なほ（なを）　・いひさわかれて（いひさはかれて）
・おとろかしおく（おとろかしをく）　・をとこ（おとこ）　・をらばやをらん（おらばやおらん）　・光を、さめたる（光をおさめたる）　・まゐれり（まいれり）　・行へ（行衛）　・もよほされて（もよふされて）　・をかしう（おかしう）　・ことわり（ことほり）　・しのびあへず（しのびあえず）　・たへず（たえず）
・つれなう（つれなふ）　・うちながめをれば（うちながめおれば）　・一とほり（一とをり）　・かなへん（かなえん）　・見えたり（見へたり）　・よわる（よはる）　・人もをし（人もおし）
大体右の通りであるが、いわゆる歴史的仮名遣いを忠実に用いているのは、宣昭の書いた方であり、宣長以来の仮名遣いへの留意を正しく学んでいるのである。『改観抄』の仮名遣いは、出版した樋口宗武が定家仮名遣いを用いているので、このような相違が出てくるのであるが、契沖にとっては不本意なことであろう。

四

次に、「朱をもて書入としるし」たものについて見ていく。これは二種類にわかれる。すなわち、本居宣長記念館所蔵の本居宣長手沢本『百人一首改観抄』に載るものと、見出し得ないものである。前者をAとし、後者をBとして、それぞれその注が関係する歌を歌順番号と作者名及び初句で示しながら順次紹介してみたい。

A (本居宣長記念館所蔵『百人一首改観抄』(宣長手沢本)に見えるもの)

1 天智天皇 (秋の田の)

〔宣長云〕苦ヲアラミハ苦ノ編目ノアラキ也アラクアメル苦ニテフケル故ニ露ノモル也改観ノ義イサ、カ違ヘル歟 書入

6 中納言家持 (かささぎの)

〔日本後紀〕卷十六曰弘仁十四年四月壬子改大伴宿祢為伴宿祢触 書入

〔唐張繼 楓橋夜泊詩〕

月落烏啼霜滿天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船

宣長按二張繼ト家持トハ同時ノ人也家持存生ノ時ニハヤ張繼カ詩此国ニ渡リテソレヲ見テ此詩ノ句ニヨリテ此歌ヲヨメタルカ又自然トソノ意ノカナヘルモノ歟 書入

7 安倍仲麻呂 (天の原)

〔此歌宣長按二第二句ト三句ノ間ヘ詞ヲイレテ見ヘシ天ノ原フリサケミレハ月出タリ此月ハ春日ナル三笠山ニ出シ月カモト

ミルヘシ云々

23 大江千里 (月みれば)

〔白氏文集〕

燕子樓中霜月夜秋來只為一人長大底四時心總苦就中腸斷是秋天 書入但不審アリ

〔但不審アリ〕とするのは『うひまなび』における白詩の引用が「秋來只一人為長」と承句の読み方に違いがあるためか。

36 清原深養父 (夏の夜は)

〔宣長云〕深養父伝メツラシキ名也和名抄但馬国養父郡夜不伝アリ 書入

37 文屋朝康 (白露に)

〔フキシクハフキシキル也キルノ反也〕 書入

62 清少納言 (よをこめて)

〔ヨニアウサカノ関ハユルサシ諸抄オヨヒ改観抄イツレモミナサヤウノタハカリ〕ニハカラレテ逢ヒハスマシキト自ノヲ云心ニ注セラレタレト宣長ツラく按スルニ此下句ハ只相坂ノ関ノヲ云ルハカリニテ逢ヲユルサシト云心ニハアラスソノ故ハマツヨニ伝詞ハ休詞トハ注シタレトコレハヨエ伝ニ同シクシテ俗ニヨモヤ伝ト同シ心也此外ニヨモ伝心ノ処ニヨニトイヘル例多シ又只文字ノタラヌ処ニ入レテ心ナキ処モアレト此歌ハヨモノ心也サヤウノニテハアフサカノ関ハヨモヤユルシハセシト云下句也 行成卿ノ返夏ニコレハ相坂ノ関ニ侍ルトアルハ逢伝心ヲカネテイハレタル也コレモマコトシクサ云ルニハアラストハフレ也枕草子ニノチノアシタハノコリオホカルモノニナン伝ルモマコトノ後朝ナラハカヤウニ

ハイフマシキヲマコトノ後朝ニハアラヌ故ニカヤウニ後朝ノヤウニワサト云ル也アフサカノ関ニ侍ル伝モアフタルヲノヤウニワサトハフレニ云オコセ玉フ也ソレヲ此哥ニハ其心ニトリアハスシテ只アフサカノ関ノウヘハカリヲ云テカヘス也然ルヲ此下句アフヲユルサシ伝心ニ見テハ詞書ノ趣ト大ニ違背スル也ソノ故ハマツ行成卿ノ鳥ノソラネハアハントテノタハカリヲニハアラスハヤクカヘリシヲ少納言ヘコトワリヲ云詞也サレハソノ返更ナレハ此哥ハ偽リヲ云テハヤクカヘリシヲ恨ムル心ニヨム哥也ソレニ何ゾアフヲユルサシト云ヘキヤ行成ハ少納言ガモトヨリカヘルトテノ偽リナレハ此関モカヘル道ニアル関ナレハソレヲユルサシトナラハカヘサシ伝心ニコソ取ルヘケレ返テアハシ伝テハ大ニ相違也モノ行成ノタハカリヲ云テ逢ン伝心ノ詞書ナラハアフヲユルサシト云テカナフヘシコレハソレト大ニ相違セリヨク〳〵思フヘシ

書入

66 前大僧正行尊（諸共に）

モロトモニトハワレ今花ヲアハレト思フガ花モ又我ヲアハレト思ヘト也

書入

大峯ハ深山ニシテ只ミヤマ木ノ名モシラスミナレモセヌ木ハカリアリテサテ知リタル人ニモ一向ユキアハスミルモノハミナシラヌ人ニテ心ホソキコ、チスルニ目ニフル、処ノ木トサヘツネニミナレヌミヤマ木ハカリニテイト心ホソキ処ニ思ヒヨラスフト桜ノサキタルミツケタラン心ハマコトニ故郷ノシル人ニアヘルコ、チシテナツカシカリヌヘキヲ也サレハ常ニミルヨリモ一入アハレニテナツカシクオモフ我ヲモマタモ口占ニアハレト思〳〵也云々

書入

（虫損の部分、宣長手沢本では「ヘト」である。）
86 西行法師（歎けとて）

ナケ、トテ月ガ我ニ物ヲ思ハスルカ八月ハ物オモハセハセヌモノヲ伝心也サテ此物オモフ八月ガ思ハスルニハ非スツレナキ人コソ我ニ物オモハスレ伝心ヲ下ニフクメタル哥也下句ハ物オモハスル八月ニハアラス外ニ思ハスル人ハアルモノヲ月ニ向ヘ八月ノ物ヲ思ハスルヤウニ泪ノコホル、ヲヨ伝心也云々月ニ向ヘハカヤウニ泪ノオツルハコノ物思ヒハ月ユエ也ト月ニカコツケルヤウナ我泪也伝也

書入

89 式子内親王（玉の緒よ）

宣長云コノ哥尤人ノイマシメトナルヘキ哥也ソノ故ハ心ニ思フヲハ人情ナレハ誰モマヌカレカタキヲ也ソレヲ慎シミテ奸サ、ルヲ以テヨシトスヘシ心ニ思フヲヲ慎ミシノハスシテホシイマ、ニ奸スコレ婦也サレハ女ナトハ心ニイカホトフカク思フヲアリトイカニモ堅ク慎ミテタトヒ命ノツクルホトノ思ヒナリトソノ命ハタエナハヨシヤタエヨ大切ナルミサラ、奸シ変スヘカラス此哥タトヒ命ヲステ、ナリト忍ヒコラエオホセント思フ心ノミサラ誰モカクアルヘキヲ也

書入

99 後鳥羽院（人をもをし）

此御製ハ只哥ノ詞ノウヘハカリヲ思ヒテハ其深意ヲミルヲアルヘカラス云々其時代ノ天下ノアリサマヲ思ヒヤリテ此御製ノ意ヲミルヘシ云々此帝ノ御時次第二朝廷ハ衰ヘユキテ関東北条家天下ノ政道ヲ専ニセシニツキテ此帝ツネ〳〵是ヲヤスカラス思食ケルユエニツヒニ承久ノ乱伝ヲノオコレル也云々人モラシ人モウラメシトハ人ヲラシクモ思召シ又恨メシクモ思召ス也此人トアルハ改観抄ニ国民也ト注セラレタレト然ラ

ス此人ハ臣下ヲ云也下ノ世ヲ思フトアル世ノ字天下ヲサシテ
云ナレハ此世ト云ニ国民ハコモル也云々アチキナクハ俗ニヤ
クニタ、ヌセンノナイ更伝心也云々

書入

以上である。99番歌の書入に「云々」が何回も出てくるのは、宣長の注の全部を写さず、省略した個所に「云々」を使っているのである。

記念館本には右に示した以外の宣長の頭注も数多くある。宣昭はその全てを写すのではなく、一部を写している。ただ、それが宣昭の選択であるのか、元廣所持本で既にそうなっていたかはわからない。

ここでも仮名遣いについて述べる。前にならって先に宣昭の書いたものを掲げ、それに対応する宣長手沢本の表記（宣長自筆と考えられる）を（ ）内に示す。傍線は稿者。

・オヨビ（ヲヨビ） ・云オコセ（云ヲコセ） ・コトワリ（コトハリ） ・ユエ（ユヘ） ・ミサヲ（ミサホ） ・ツヒニ（ツ井ニ） ・ヲシ（オシ）

見落しがあるかもしれないが、これで見ると宣昭は宣長の仮名遣いも『改観抄』と同様に訂していることになる。しかも宣昭の方が歴史的仮名遣いを用いている。意外なことだが、記念館本『改観抄』への宣長の書き入れの仮名遣いを、宣昭書き入れ本『うひまなび』では歴史的仮名遣いに訂しているのである。宣昭が宣長の仮名遣いを訂していると述べたが、これは結果としてそうなっているということであり、宣昭の写した稲田元廣所持本で既にそうになっていたのかもしれない。

宣長が歴史的仮名遣いを用いていない個所がいくつかあることは明らかだが、全体がそうだということではない。稿者は以前『玉勝

間』の草稿本を見た時にも同じことを経験し、意外なことと感じた。宣長は草稿本や個人的な覚えを書き付ける場合、必ずしも厳密に歴史的仮名遣いを守っていないのではないかとというのが、稿者の漠然とした考えであるが、これも精査せねばならぬ課題だろう。遺憾ながら今後の課題として残しておく。

次に、朱で「書入」と記してあるもののうち二種類目をBとしてあげる。

B（本居宣長記念館所蔵『百人一首改観抄』（宣長手沢本）に見えるもの）

3 柿本人麻呂（あしひきの）

「宣長曰したるは繁垂シタリの意

書入

5 猿丸大夫（奥山に）

「本」

モミチハ聞人ノ踏ワクル也

書入

25 三条右大臣（名にしおはば）

「改観抄此哥ノ上句ノ註イサ、カ心エカタシ云々スヘテ名ニシオハ、ト云詞ハミナ名ニカ、ルヲナルヲ名ニヨスル方ナラテ云心エス云々カツラヲ女ニタトフルヲ此抄ニシタカフヘシ下句ノ義モ此抄ノ説ヨシ云々一首ノ心ハアウ坂山ニアルサネカツラソノ山ノ名ニオハ、逢ヘキナルニナニトソ人ニシラレヌヤウニソノサネカツラヲ繰ルヨシモカナ伝心也カツラヲクルハ此抄ニイヘル如ク女ヲワカニマカスルニタトフル也

書入

31 坂上是則（朝ばらけ有明の月と）

「千秋云朝ホラケノホラケハ朗明ホクラアケノツ、マリタル也云々

書入

65 相模 (恨みわび)

〔荷田在満云〕泪ニホサヌ袖コソ朽ヌヘキニソレタニクチスシテ
アルモノヲ伝意也コレヲ改観抄ノコトクミテハタニノ詞キコ
エカタシカノ説ノ如クナラハ袖サヘトコソアルヘキナレ
云此説ヨシタニハ物ニツアラソヒ云〇〇オクテニヲハ也サヘ
ハ物ノ順ニソハルニ時ニイフ詞也

宣長云此説返テヒカレ也改観ニシタカフヘシ

書入

75 藤原基俊 (契りおきし)

〔新古今釈教〕ホタノメシメチカハラノサシモ草ワレ世中ニア
ランカキリハ 此哥ハ清水観音御哥トナシヒツタヘタルト
ア云々此哥ノシメチカハラノサシモ草伝ルイカナルトモ
解シカタシ初句ト第四五ノ句ヘ一向カケアハヌ也ヨリテシ
メチカハラヲ娑婆世界トシサシモ草ヲ一切衆生トスコレニテ
哥ハ聞エタレト娑婆世界一切衆生伝ヲ何故ニシメチカハラ
ノサシモ草伝ソ其イハレヲ知ラネハ是又解シカタシ然ルニ今
此改観抄ヲ見レハ六帖ノ哥ニ下野ヤシメツカ原ノサシモ草オ
ノカオモヒニ身ヲヤヤクラム コレニテ始メテ聞エタリ已カ
思ヒニ身ヲヤクトアルヲ衆生ノ三毒ノ火ニヤカレテ火宅ノ中
ニクルシミタルヲヲタトヘテヨメルナルヘシ已カ思ヒニ身ヲ
焼サシモ草モナホ我ヲタノメ我世ニアランカキリハ其ノ苦ミ
ヲスクヒタスケントノ御哥ナルヘシ云々

書入

以上である。

記念館本に見えない見解が、稲田元廣所持本になぜ書かれているかという点が大きな問題だろう。考えられるのは宣長の口述を書き留めた誰かがいて、それが伝わったということだろう。

5 猿丸大夫歌の注の初めにある「本」という言葉の意味も未だ考

えが及ばない。「モミチハ聞人ノ踏ワクル也」という注は確かに記念館本にはない。しかし『菅家万葉』の詩に「勝地尋来」という詩句があるのを基に「哥ノフミワケモ人ノフミワクル也」とする注はある。しかしその他の書人が記念館本をそのままの言葉で引いていることと符合しない。

また横井千秋や荷田在満の解釈がどのような経過で書き留められたかもよくわからない。虫損の最初の〇の部分に残っている部分から判じて「真」と思うのだが、そうだとすれば「真淵」であろう。

在満の見解を真淵が「ヨシ」と許し、宣長がそれを否定して『改観抄』に賛同したということである。千秋の場合も在満の場合も、宣長を経由していると考えるのが自然かと思うが、それ以上のことは今の所理解できないでいる。御教示を得れば幸いである。

五

次に、清水宣昭独自の見解を紹介する。

16 中納言行平 (立ち別れ)

我今君に立わかれていなは君はさそ歎き給ふらんもしかの因幡にて君の我をまち給ふといふ事をさかは云々と詞を加へて見るへし此ときさまいなはといふ語勢にうとし 宣昭

(この注は、水浅葱色と薄柿色の二枚の楮紙を継いだ料紙に書かれ、上之二巻第45丁表の付箋となっている。『うひまなび』『改観抄』のどちらにも同意できず、自説を書き留めたと考えられる。)

30 壬生忠岑 (有明の)

在明の云々 初句は女に別る、時のさま也下に暁といへるに

てしか聞えたり二句は其有明の月のつれなく見えしにてこれ
も女に別れかたくする暁に月はつれなく見えて我悲しと思ふ
心をもしらす白なるをいふのみにて只別る、折のさま也され
はさるをりの別れよりよに暁はかりうきものはなく思ひなり
ぬと也

改観に古今の類哥と六帖の題とによりて不逢帰恋の意にとき
うひまなひもそれに同じさまなれと三ノ句別れよりといへる
は必あひて別れし意とこそ聞えたれ猶よく考ふへし 宣昭

(この注は薄柿色の楮紙に書かれ、中之一巻第9丁表の付
紙となつてゐる。)

63 清少納言 (よをこめて) (原文の二行割注はへ) を付して一

行に書くこととする。

此哥ノ註氏イツレモ得失アリテ皆全クハエ解ハテスコハマツ
端詞ヲヨク心エテ解ヘシ 大納言行成卿(少納言ト)物かた
りなとして侍りけるに(行成ノ)内のものいみにこもれはと
ていそきて帰りてつとめて(少納言ノモトヘ)鳥の声にもよ
ほされて(行成ノカクノ玉ヘルハヨヘ少納言ト物カタリシ玉
ヘルヲヲタハフレニ好色ノカタニトリナシ玉フ也サテ男女シ
ノヒテ相合夜ハ鳥ノ声ニモヨホサレテハイソキテカヘルモノ
ナレハカヤウニヨヘノサマヲタハフレテ)といひおこせて侍
りければ(少納言ノ答ニ)夜ふか、りけむ鳥の声は(イソキ
テカヘリテサテ鳥ノ声トノ玉ヘルニヨリテヨフカ、リケン鳥
ノ声トイヘルナリ) 函谷関(ヨフカキ鳥ノ声トイフニツキテ
函谷関ヲオモヒヨリタルナリ)のことにや(行成ノ鳥ノ声ニ
モヨホサレテトノ玉ヘ氏只タハフレノ空言ニテ実ニ鳥ノナキ
シニハアラサレハシカノ玉ヘルハカノソラナキシツル函谷関

ノヲニヤ有ラント也)といひつかはしけるを立かへり(又行
成ヨリ)これは逢坂の関に侍る(トハ少納言ノ唐ノ函谷関ヲ
トリ出テイヘルニヨリテイヤ)我ハサヤウノ唐ノ関ニハア
ラス我ハヨヘ君ニアヒシ逢坂関ノヲニコソアレ伝意ニテスヘ
テ是マテタハフレナリ)とあれはよめる 夜をこめて云々
哥ノ意カノ唐ノ函谷関ハ夜ヲコメテ鳥ノソラナキヲシテ関守
共ヲタハカリヲホセテ孟嘗君ノ徒トホリハテタルヲハアリ氏
ソハ唐ノ函谷関ナレハ也君ノヨヘ我ニアヒタリトイトヤスゲ
ニノ玉ヘ氏世中ニ男女相合伝逢坂ノ関ハカリハ殊ニサヤウニ
ヤスクハカリオホセラル、モノニハアラシトイフニテオシナ
ヘテ男女相合ヲノヤスカラヌナラヒヤセケンノウヘニテイヘ
ル也サレハ枕草子此哥ノ次ノ詞ニ心かしこき関守侍るめれば
トイヘルモ親ニマレメノトヤウノ人ニマレ誰ニマレ側サラス
マモリテアル人ライヘル也コノ心かしこき関守ヲ結句ノゆる
さしトアルニ合セテ心ウヘシ 改観抄ニゆるさしトイフヲ
少納言ノ自ノユルサヌヲニトケルハタカヘリサテハよにトイ
フヲナニトカトクヘキ又ゆるさしハ俗ニゆるさまいトイヘル
ニテユルサストイフトハイサ、カカハリアレハ自ノヲトシテ
ハカナハスサレハコハ只世ケンノ男女ノナラヒライヘル也
よにノ説ウヒマナヒノ如シヨモ伝意ニイハレタル本居翁ノ説
ハワロシ

文政九年戊戌正月十九日

清水宣昭釋

(この釈は楮素紙に書かれ、中之二巻第52丁裏の付紙となつ
てゐる。「文政九年戊戌正月十九日」という年記のあること
が注目される。)

75 藤原基俊(契りおきし)

続日本後記卷第八承和六年十二月癸亥勅以下經二千興福寺維摩會講師一之僧^上宜^レ為二宮中最勝會講師一自今以後永為二恒

例一

宣昭

(この注は楮素紙に書かれ、下之終卷第十四丁表の付箋となっている。同じ引用は『改観抄』にもあるが、本文に多少の相違がある。宣昭が改めて引用をした理由である。『改観抄』本文を参照して頂ければ幸いである。)

六

最後に、『松の落葉』からの引用が一カ所だけあるので紹介する。
25 三条右大臣(名にしおはば)

松の落葉三 云々さねといふ名の女ならんとは名にしおは、とあるにてさたかにしられたりさねといふ名をさねかつらといひなしたるそ哥なる云々 さて此御哥の心はいましか名さねといひてさねかつらの名におふとならちかきわたりなるあふ坂山のしたはふさねかつらのやうに人にしられすしてしのひて来るよしもかなとの給へる也くるはかつらの縁語也云々

(右の引用は上之二巻最終丁裏の上欄と版本の本文が終ったあととの空白部にまたがつて書かれている。『松の落葉』は、宣昭の師、藤井高尚の著。『日本随筆大成』第二期第22卷所収の『松の落葉』の本文と比較すると、抄出された限りにおいて全く異同はない。)

結 語

以上で、清水宣昭書き入れ本『うひまなび』の紹介を終えることとしたい。宣昭がこの書き入れと考察を行なったのは、文政九年正月のことだったとしてよいだろう。清少納言歌に付された宣昭釈に見える「文政九年戊正月十九日」、及び識語に見える「文政九年正月廿二日」という二つの年記がそれを示している。比較的短期間に行なわれたように思われる。この年、宣昭は34歳だった。本居春庭に入門したのが文政二年、藤井高尚に入門したのも同じ頃と推定されている。^{注6} 52歳で家督を譲った宣昭であるから、34歳といえども多忙な時期だったと想像される。しかし、宣昭の著作はこの頃にも見られる。たとえば『玉小櫛そへ櫛』は文政四年中頃までには^{注7} 摺筆され、『紫式部日記釈』は文政十三年に草稿が成っている。また、『宣昭集五』は文政四年の自筆歌集である。宣昭の学問はこの時期も熱心に進められていたと考えられる。

宣昭の書き入れをいくつかの種類に分けて紹介しながら、そこで思ったことをその場で断片的に述べてきたが、不明の点が多く、今後の課題とせねばなるまい。本稿を書きつつ強く感じたのは、宣昭の熱意と精確さであった。稿者においては宣昭を評価すること、従来よりかなりの程度高まったことを記して拙い紹介を終える。

なお、本居宣長記念館所蔵の宣長手沢本『百人一首改観抄』は、以前、記念館に依頼して作製して頂いた写真版を用いた。御礼を申し上げる。

注

(注1) 茅場康雄氏「清水宣昭考一―五」(『学苑』平成三年三月号、平成四年八・九月合併号)、及びその後『学苑』に掲載された宣昭書き入れ本に関する論稿、『文莫』第十九号(鈴木服学会発行 平成六年十一月)所収「紫式部日記釈」引用の鈴木服の注釈」など。

(注2) 『稻山女学園大学研究論集』第二十号第一部(平成元年三月)・第二十二号第二部(平成三年三月)・第二十三号第二部(平成四年二月)

(注3) 『高山市史』……初版は昭和二十八年三月刊、復刻版が昭和五十六年九月に出ている。引用は復刻版に依った。

(注4) 以下、その所持本『改観抄』にかかわる場合が多いので「元廣」で記すこととする。

(注5) 『日本古典文学大辞典』の「田中大秀」の項の記述に依る。担当筆者は尾崎知光氏。

(注6) 茅場康雄氏「清水宣昭考一」(注1参照)

(注7) 同氏「清水宣昭考二」「同三」に依る。

(注8) 注2の拙稿を参照して頂きたい。

補(九六頁)

『高山市史』の「稲田元浩」の項に見える『高原旧事』は『国書総目録』に「たかはらきゅうじ」として掲載されていて、高山の香木園文庫に在るとされる。田中大秀旧蔵本である。あるいは「たかまのはらきゅうじ」と読むべきかもしれない。遺憾ながら未見である。